

若草芸人の頃、生活に余裕がありませんでした。舞台に立つても十分な収入にはならず、先輩に何度も食事をごちそうになり、生活を支えていただけていました。おなかを満たされることもありがたかったのですが、気にかけていただいている優しさがあるからどんなつらさでも乗り越えることができました。

「ちゃんとお礼をしたい」そう思い、ささやかですが先輩へ菓子折りを持ってお礼に伺いましたが、先輩は受け取ってくれません。

⑦ 恩送り



「俺も苦労した時に、いっぱい先輩に助けられたんや。俺に何かするんじゃなくて、その分であなただの先輩に優しくしてあげなさい」



この時、初めて「恩送り」という言葉を知りました。受けた恩を本人に返すのではなく、次の世代へ受け渡していく。その考え方に

深く感動しました。先輩も決して裕福だったわけではありません。それでも先輩を「飯に連れて行き、自分が受けた恩を次の世代へつないでいました。」

その先輩に連れて行っていたいた難波の立ち食いうどん屋は、今も通い続ける思い出の店。先輩と一緒に食べたカレーうどんとかや、ご飯を味わいながら、落着込んだ時は元気をもらい、うまーい。その時は気持ちを締めつけていま

す。あの店を訪れるたび、先輩から受けた恩を思い出し、「次は自分が誰かに恩を送る番だ」と心に誓います。私にとって、あの店は「恩送り」の原点なのです。



話は変わって、娘がテレビ局に就職し、報道記者になりました。今年で2年目を迎え、毎日のよう

受けた優しきや喜びは次の誰かへ

に現場を飛び回っています。

ある日、「どうやって取材先を探しているの？」と尋ねると、「基本的には事件や事故を取材するけど、自分で選べる時は子どもを取材することが多いかな」と話してくれました。理由を聞くとこんな答えが返ってきました。

「小さな頃、親子漫才をしていた時、テレビの取材を受けたことがあったよね。一番覚えていたのは、お父さんやお母さんが親戚や近所の人にすくうれしように『テレビに出るんです』って話していた姿やねん。そして、続けてこう言いました。『テレビ出演は子どもはもうろんやけど、

その家族にとつても一生の宝物になる思い出なんやと思っただ。だから、娘は地域で頑張り、一生懸命挑戦している子どもたちを積極的に取材しているんです。テレビ取材をされたうれしさを今度は記者という立場で別の家族へ届けようとしている娘。その話を聞いた時、私は若い頃に先輩から教わった「恩送り」という言葉を思い出しました。

人から受けた優しさや喜びは、自分のところで終わらせるのではなく、次の誰かへつないでいく。「恩送り」という生き方は、人の心を温かくし、その温かさを未来へ届けてくれるのだと思います。